驛

幸田文

中央公論社

價 二八〇圓

昭和三十四年三月十日發行
昭和三十四年三月二十日再版

著者 幸田文

印刷 精興社
東京都青梅市根ケ布三八五

發行所 中央公論社
東京都中央區京橋二ノ一
電話(56)五九二一～三〇

驛奥附 ©

目次

さとがへり　三
くぼみ　一三
濕地　二二
乾いた丘　三三
町はづれ　四一
かげろふの野　五一
桐の木の家　六〇

裏庭の回想　六九
逃げる　八一
人形　九三
貯金箱　一〇三
見舞の花　一一四

隨想

地下道　一二七
入學　一二九
路のまみれ　一三一
さかな　一三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東京の土　一三六
つきあひ　一三八
おと　一四〇
旗　一四二
製鐵　一四四
一人の力　一四六
交通禍　一四八
座　一五〇
からつゆ　一五二
かつぱの皿　一五四
鯨　一五六
持たぬ手　一五八

愚母の思ひ　一六〇
水の力　一六二
弱さ　一六四
餘得　一六六
桃と讀書　一六八
ぶつかる　一七〇
ひとり　一七二
狙ふ　一七四
遠淺　一七六
みのり　一七八
あとがき　一八一

驛

さとがへり

驛といふものは、汽車や電車が發つたり著いたりするだけのものだのに、なんだかをかしな力をもつてゐる。

それはあたりまへかもしれない。乘りものが出たりはひつたりするたびに、そこにはいろんな事がらやいろんな感情がくりひろげられるし、驛は否應なくさういふものを呑みこませられ、呑みこんでゐるうちにその澤山の經驗はある力にも發達するだらうし、だから私たちは驛ではなんとなく感じつぽくさせられる。都會の大きな驛でも寒村の小驛でも、驛にはなにか感じがある。

東京驛、——この驛にはもちろん驛特有の力がすくなからず立ち籠めてゐるが、その上にも

ときく〳〵は、ひどく國といふものをつきつけてくることがある。

その晩は熱を出してゐて、見送りに行けなかつた。廂をめぐつてかなり耳につく雨が降つてゐた。十一月末の夜の雨のつめたさが枕の上にゐて察しられ、殘つた柿の實も咲きだした山茶花も打たれてゐることがわかつてゐた。そしてしきりに、見送りに行かれない東京驛の、別れへと思ひが走つた。旅立つて行くのは、四十になつたたあさんと數へ五歳を頭に三人の幼い子たちだ。汽車は九時だから、いちばん下のなどはもうたあさんの背なかで眠つてしまつてゐるかもしれない。三人の子では手荷物もたくさんにきまつてゐるが、どうして行くだらう。上が五ツではまだお辨當包み一ツでも滿足な手助けにはなるまい。都合よく行つて八日間の旅だといふ。たあさんの苦勞が思はれてならない。五月に里歸り歸國をして親もとの半年、つめたいこの雨のなかを、夫と上二人の子の待つ中國へはる〳〵渡つて行かうとして立つ別れなのだ。見送りは賑やかなのかどうか見當がつかない。親兄弟・親類・友だち、——私も熱さへ出なければそのなかの一人だが、——里歸り歸國の世話人などが送つてゐるのだらうか。この別れにはあきらかに國がかぶさつてゐる。驛はあの特有の力で、みんなの氣持をいつそう平らかでな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いものにさせてゐるだらう。私も床のなかにゐて、平安でない見送りを時計の針に向けてゐた。

たあさんが四ツ五ツのときから私は知つてゐる。家が道を中にして筋向ひだつた。色白でぽつちやりした利口な子だつた。その利口さが人情的にも實務的にも利口であり、數の觀念や理の筋にも暗くなさゝうなけはひを示した利口さだつた。かういふのは生れつきも敏(さと)いところへもつてきて、一家一族誰にもかはいがられ、そのゆゑにその性來の利口がより餘計に增進させられてゐる、といつた感じだつた。實際かはいがられてゐて、著物などもきれいにしてゐて、おしやまなのだ。私は一ㇳまはり上の辰年で、たしか十六か七のこれも生意氣ざかりのころなので、何よりもこの子の利口さがかはいかつた。二年三年とするうち、この子には「たけくらべ」の美登利(みどり)を思はせる下町的な利かん氣の强さが現はれだして、それは事毎に興味深く眺められた。

交際はその後、私のはうの轉居で一時絕え、つぎに逢つたとき、たあさんはもうりつぱな娘——と云ふより、職業を持つしつかりものの骨柄(こつがら)を具へてゐた。陸軍省といふ堅いお役所に、邦字印書といふ堅いしごとで堅く勤めてゐた。よく覺悟のついた道を歩いてゐるもののやうだつた。飾らずに云ふなら、子供のころのぽつちやりしたかはいさは顏にも姿にも失はれ、その

かはり利口さには、自分の現實は正しく承知してゐ、かつ善處してゐるつもりだといふ强さが加へられてゐた。眼鏡をかけてゐた。著るものも簡素なのを著てゐて、それがかへつて昔はあまやかされて、色彩の多いきれいな著物を著てゐたことを思ひださせた。再會は嬉しかつたが、私には、小さいときは餘りにもかはい過ぎたなあといふ、寂しい思ひもあつた。けれども、さういふ私もそのときは生活に苦しんでゐる最中で、けふは再起したいと頑張るのに、あすはたちまち無氣力に怠惰だといふことをくりかへしてゐた。つてを辿つて人のなさけをあてに、わづかな酒を商ふことでくらしてゐたのだが、それはたあさんの毎日にくらべて態度も經濟も恥づべきものが多かつた。たあさんは能ふかぎりの知人へ私の酒の賣り口をひらいて援助してくれた。しかしこれも長いつきあひには續かず、私は離婚したし、戰爭は始まるし、たあさんは現職のまゝ大陸へ渡つた。敗戰の日が來た。ずつと過ぎて、たあさんがあちらで結婚したと噂に聞いた。私はすべての臆測を避けて、いつか確かに知る日にそのことは考へるべきだと思つた。だから今度逢つたのは十何年目だらうか。やつと品川驛へ歸つて來たのだ。

「あゝ文子さん。思ひもかけないわ、迎へに來てくださるなんて。」――くださるといふことばがいきなり非常に美しく、日本と女とを響かせてこちらを打つてきた。が、見ればなんとい

ふ深けかただ。異境の氣候のせいだらうか、顏の色は私の知つてゐるたあさんの皮膚ではないやうだつた。思つた以上の深けだ。が、またなんとしつかりした健康なのか。健康が若さを保つとよく云ふが、あてはまらない場合を私は見た。この人は健康だからさま〳〵なことにも耐へて深けたが、いまなほ健康は苦難を悠々と御してゐる、と受取れた。もしかりに病弱だつたら、あるいはかへつて若くてゐられたらう。健康で深ける、——異國に培はれたみごとな「健康の深け」だと思ふ。

胸の奥が熱くなる思ひで眺めてゐると、たあさんは涙をこぼしつゝ笑ひつゝ人と話してゐて、しかも奇妙なことに、いかにものびやかにこせつかないで泣き、笑ひ、話してゐた。私はたあさんのうしろに、たあさんの夫で子供たちの父である中國の人の映像を見る思ひがした。たあさんは久しぶりの親類緣者に圍まれて、おそらくそのとき心中に夫を思つてゐたとは考へられない。きつと出迎への人だれもが、中國のその夫のことを考へてゐるひまはなかつたとおもふ。私もそんなことは思つてもゐなかつたのだが、血緣や友人たちの再會の興奮の環からちよつと外れて眺めてゐたら、たあさんの夫君がたあさんのうしろに立つてゐることがわかつたのである。夫婦のなかといふものの感が深かつた。もし今ほんとにその人がこゝにゐるとしたら、私

は何と云つて挨拶していゝのか。「今日は」ではない、もつとずつと晴々したものだつた。「ありがたう」が浮んだ。この夫婦がいかにして成りたつたか、その後の人生行路がどんなものだか、それらを尋ねることはもういらないとおもふ。たあさんの深けと健康と、おそらく當人も無意識なのであらうが、妻が發散して見せてゐる夫の雰圍氣と、この三ツが、私の里歸り歸國へ懷いてゐた不安を消した。私はたあさんを通じてそのひとの善意を信じ、またこちらもそこへ好意を積んで行かうときめた。

すると、そのとき三人のうちの中の女の子が、持つてゐた夏蜜柑を落して、それがころがつた。子供はするどく聲をあげ、はつと、——私にはわからぬ中國語だつた。中國語だといふこととほとんど同時に、子供の云つたことを私は知つてゐた。持つてゐたものを落した驚きと、土に塗れた果物をかなしむことばなのだ。落した果物を呼びかへしてゐる叫びなのだ。慌てゝ何か云ひながら、私が拾つて渡すと、泣きさうな眼を笑はせた。たあさんの幼顏のおもかげがあり、またこの上なく確かに中國的なものを認めるのである。この場にゐあはせなくても、そのひとはそこにゐた。祈りたいやうに思つた。たあさんはいま里歸りしてゐてあちらは留守なわけだが、こゝにゐる妻の身のまはりに夫が感じられるやうに、留守のあちらの家庭にもきつ

と妻の影ははつきりしてゐるだらう、と私は信じた。里歸りに半年の時を割いた夫婦のなかへ私は信頼を置いていゝと思つた。

けれども六ヶ月の滯在中、私は五度しか逢はなかつた。それもゆつくり話しこんだのではない。こんど歸つて來るまでの十何年間の話も、外地での敗戰と結婚とを含んでゐるから、並一ト通りの十何年の話とは分量が違ふ。そこへ加へて、かうして歸つて來てみれば日本も東京も知りびとたちの變りかたも、およそ思ひの外であり、故國とは云ひ條おちつけないものがさまざまあり、歸國以後の心勞や感情やもの思ひや、それだけでも話しつくせないほどなのだ。多すぎる話には切りだすきつかけがないものなのだ。たあさんも少ししか話さず、私も當面のことしか云はなかつた。斷片的な飛び〳〵の話を、あまり氣にして鋭く訊かうとするのも禮儀ではないから、私も特別な注意はしない。

「子供がわりにかはいゝ顏だちしてゐるので、あなたの主人はいゝ男前なんだらうつて、からかふ人がゐるわ」と云ふ。いゝ男前だとも、さうでないのだとも云はないが、からかはれたことは寂しげである。寂しげに口を噤むところに、私はやはり心がとまつてしまふ。いやでも夫

婦の上には國が纏ひついてゐる。夫婦のなかには些細なことでも「國を背負つた節度」を守る習慣がついてゐるのではないかと思ふ。たあさんは利口なひとだから、口を噤む寂しさをこなしてゐるのだらうが、たあさんに對ひあつたその夫の心づかひも眼に見えるやうである。

「むかうは八月十五夜の行事を隨分たいせつにするの。うちは毎年そのとき、おかあさんにできるだけの贈りものをするんです。あたしも、だからずつと毎年その贈りものに氣を入れてゐるの。こつちの自分の母のことを想ふわ、……おんなじですものね。さういふ人情は國籍なしに受入れられるんでせうね。主人は私がお姑さんに何かするのを、お世辭でなく喜んでゐる」と云ふ。おもひやりは盡す妻にもせつなからうが、受ける夫にも同じだらうと考へられる。

「中國では何年かをくぎつて、開發や復興の政策をしてゐるでしよ。切りつめられるだけ節約してゐるから、布地なども一年に三十五尺の配給しかなくて、それこそ繼いで〳〵繼ぎぬくの。乏しいけれど貧乏とは性質が違ふから苦にならない」と云つて、ふとひとりごとのやうに、「あのひとは紺は好きでなくて黑ばかり著る。それもずぼんは穿かずに中國の古い型のを使ふの。私が縫ふんだわ。」——自分の國の古い型の著物を著ようとする男なのだ、と私はおぼえる。たあさんは小學校で習つたにちがひない運針を役立てるのだ。男はそれを當然だとしてだけに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com